

るのみである。

シベリア抑留の記憶の一部・

ブカチャーチャ収容所

愛知県 森 武雄

大正九（一九二〇）年十月二十三日、愛知県一宮市にて生まれる。

昭和十八（一九四三）年十二月、早稲田大学商学部仮卒業。

現在無職。長男夫婦、孫三人と妻の七人家族。

昭和十八年十二月、学徒動員で現役兵として兵庫県加古川の戦車隊（大阪師団）に入隊。

その後、経理部幹部候補生に合格。昭和十九年五月新京経理学校へ入学、同年十月卒業、見習士官となり新京（長春）貨物廠に配属される（満州第一九部隊）。

兵科部隊でなかったため、主として軍属と満人

労働者で軍人は一〇パーセントもいなかったの
で、他部隊の構成・装備などの状況については不
明。貨物廠の被服・食糧などの在庫は昭和二十年
に入ると半減した（南方戦線へ）。特に主食の米
の不足が目立つようになった。しかし昭和二十年
五月頃は、大豆、高粱ゴリャンなどの農作物の調達は比
較的順調であった。

ソ連侵攻は、情報としては直ちに全員に知らさ
れたが、戦闘部隊ではなかったため部隊の編成・
配置替えなどは終戦日までなく、侵攻への対応、
戦闘は一切なかった。

終戦の詔勅は全員（軍人、軍属のみ）営庭に集
合整列してラジオ放送で聞いた。部隊長の訓辞な
ど聞いたが全く記憶にない。相当なショックを受
けたのは事実であったが、七月になってから敗戦
必至の情報を知っていたので大した混乱はなかつ
た。満人、朝鮮人による貨物廠内の物資の盗難事
件（小規模のもの）はあったが、大事件はなかつ
た。ソ連軍の進駐もなく、平穩無事で命令が出る

まで軍人は営内居住で勤務していた。

敗戦で我々の部隊は現地解散もせず、一カ月位は日本人が管理業務をしていたと思う。貨物廠であり、若干の武器はあったがソ連軍の武装解除はなかった。

昭和二十年八月二十三日、ソ連軍より命令され南新京にある学校へ移動集合した。付近一帯には日本軍部隊が五、六千人位集合していた。いよいよ軍の指揮下に入り武装解除を受け、ここで新京貨物廠の部隊は事実上解散した。

同年八月二十五日頃、作業大隊第九・第一三大隊約三千人位が編成され、私は大隊付主計将校として赴任せよとの命を受け、全く知らない部隊と満軍の軍官学校の生徒（十六歳から十七歳位の少年二百五十人位）と召集兵ばかりの寄せ集め部隊と行動を共にすることになった。占領下の新京は比較的治安はよく、戦闘、大きな暴動などはなかった。ソ連軍、朝鮮人の暴行略奪はひどく、日本の民間人の被害はかなりひどかったようだが大

事件は起こらなかった。

武装解除はソ連軍によって整然と行われ、何も問題はなかった。八月末日、作業大隊の編成が終わったのでいよいよ作業のため出発準備で忙しい時で、私達の大隊はどこへ行くのか、何の作業をするのか、そしてこれからどうなるのか、不安な毎日であった。九月上旬、私はソ連軍から次のような命令を受けた。「大隊は作業に出発するから三カ月分の食糧を準備せよ」と。私は早速新京貨物廠に向いて食糧の交渉をしたが、時既に遅く、主食の米麦はほとんどなく、大豆と高粱、粟が少し、調味料は塩のみで味噌醬油は皆無であった。この食糧状況がシベリアに入ってから私達の部隊の悲劇を生む原因となった。

九月十日頃新京を出発。私達兵隊仲間の噂では、食糧を三カ月分持つて行くので長い間シベリアで作業させられることはない、強制労働を何年間もさせられるとは、一抹の不安を抱いていたが想像もしていなかった。ソ連軍の将校で「シベリ

ア鉄道の修理工事をしながらウラジオストックから東京ダモイだ」と全くでたらめを言う者もいた。そんなことを私達は誰も信用していなかったが、心の中では願っていたかも知れない。

窓のない薄暗い貨物車に積み込まれた兵隊は、横になって眠れない位狭い場所で重なうって寝なければならぬ状態で、もちろんトイレの設備はなく、バケツを持ち込んでいたので適宜に利用しながら北へ北へと列車の旅を続けるのだが、悪臭がひどく不潔極まりない状態であった。列車は所々で停車（駅や畑の中）しながら進んだ。停車中に用便をしたり、飯盒などで食事を作ったりしながら、所によつては饅頭などを満人が売りにくる風景もあつた。まだ日銀券が一部通用していたが、その価値は饅頭一個百円という話もあつた。その頃からソ連兵の監視が嚴重になり、自動小銃を持つた兵隊が私達の自由を奪つた。そんな状態の中で思つたことは、抑留者という意識ではなく「捕虜」であつた。敗戦国の兵隊の悲哀を痛感さ

せられた。話題は、これからどこへ連れて行かれるのか、我々の運命はどうなるであろうかで、不安で頭が狂いそうであつた。

一週間位かかつて黒河へ到着。アムール河を渡つてソ連領ブラゴエシチェンスクへ到着。シベリア鉄道に乗つて出発したが、夜中に駅を出たので果たして汽車は西を向いて走っているのか東へ向かつて走っているのか全く分からなかつた。ソ連側から正式に何の通告もなく、ソ連の警備兵に聞くと「ヤポンスキーはウラジオから東京ダモイだ」と言うのがいた。列車の走るレールの音を聞きながら不安で眠れずウトウトしていた。長かつた夜が明けて太陽が列車の後方から昇つてくるのを知つて、私達は悲嘆のどん底に落とされた。ソ連側から今後のことについては一切秘密で何も知られされないと思つた。一縷の望みを断たれて、この先のことを考えると不安で気が狂いそうであつた。

チエルヌイシエフスクでシベリア本線と分かれて北へ六八キロメートル走って炭坑の街ブカチャーチャ（チタ州）に十月五日に着いた。現在は炭坑がさびれたので人口が八千人位（当時人口一万四千人位）と減少したが、帝政ロシア時代から流刑地として有名な所である。支線終点の小さな田舎村で、新京を出発してから約一カ月もかかった長旅である。

私達の作業大隊の入ったラーゲル（収容所）は駅から歩いて十五分から二十分位の近い場所にあった。しかしながらラーゲルは倉庫に使っていたと思われる木造のバラックが四、五棟あっただけで、全員収容することができず、一部屋分外にテントを張って生活しなければならぬことになった。シベリアの十月は夜の温度がマイナス二〇度まで下がることもあり寒くて眠れない。最初から最悪の環境であった。目前に冬將軍が迫っていたので宿舎の建設は総力を挙げて行われた。便所のこと忘れられないことの一つである。宿舎

から五、六十メートル離れた場所に板囲いで、土を掘った穴の上に二枚の板を渡しただけであった。冬になって糞が凍るようになると取り除かねばならないから、これがまた大変厄介な仕事であった。鉄の棒で壊して運んだものだ。

私は、昭和二十年ブカチャーチャ第一分所に入ったままで昭和二十二年九月、帰国すべくナホトカに行くまで他の収容所へ移動することがなかった。他地区のラーゲルのことは全く知らなかった。ブカチャーチャに着いた時寝る場所もなかったが、幸い工兵隊が一個中隊おったので建物の修理、増築は手際よく、約一カ月位でペーチカの暖房設備、宿舎外柵、監視所門などが完成し、一応ラーゲルらしいものができ上がって、夜寝る所を確保してホツとした。

シベリアの冬は早く、想像以上にきびしく、夜は零下三〇度に下がるようになっていた。もちろん風呂などなく入浴することはできない（昭和二十一年夏に蒸気風呂ができた）。ラーゲルに入る

と同時に虱が発生し、三週間位で全員に広がった。衣服の消毒をなす術もなく、暇をみて爪でつぶすだけであったので、入所一カ月位で発疹チフスが大流行し死亡する者が続出するようになった。病気になる作業に耐えられない者は女医の身体検査を受けるが、それは裸になり肉付きを見るだけ、特に尻の肉があるかどうかを見るようになった。ソ連軍の女医が一人、日本軍の軍医二人などで医務室、病院の設備を造ったが、医療器具や薬品は皆無で、手のほどこしようなない状態であった。ソ連側には何度も交渉したが全く誠意がなかった。十二月に入ると気温が零下四〇度まで下がる。厳冬期になると病人は更に増加していった。発疹チフス、下痢がやがて栄養失調となり死亡していくことになる。続出する病人で病室に収容することもできず宿舎に寝かせておくだけ。薬もなく、更に悪いことには食べさせる病人食もなく、死を待つだけという状況であった。

劣悪な生活環境、酷寒の中で炭坑、森林の伐採

などの強制労働で次第に日本人の体力は衰えていった。ブカチャーチャ地区の収容所（正式にはチタ地域第二三収容所第一、第二分所）に収容された日本人は約三千人と言われているが、その中で生きて帰れた人は千四百余人で、残りは死亡したのである。ブカチャーチャ村には日本人墓地が四カ所、第一分所の第一墓地には五百余人が眠っている。その他二カ所の墓地は残念ながら不明である。第一分所は昭和二十一年の春、収容所の建物の一部が突然崩壊して十三人が非業の最期を遂げた。私がいた第二分所の南側に広い丘（一〇〇メートル×一五〇メートル）の真ん中に一五メートル位の大きい赤松が一本立っていたことから私達は一本松墓地と言うようになった。この一本松墓地には八百五十人余りが眠っている。特にひどかったのは昭和二十一年一月頃から三月までの厳寒期であった。最も多い日には二十七人も死亡者を葬ったことがある。ラーゲルの門が本部事務所ですぐ近くにあったが、毎朝、衣服をはぎ取られ

裸で凍らせた骨と皮になった死体にムシロがかけられ、荷車でコトコトと音を残して門を出ていくむごい光景は正に地獄絵を見るようで、とてもこの世のものではなかった。心の中で手を合わせて見送ったことは終生忘れることができない。

一本松墓地について忘れられない光景の一つがある。死んだ仲間の墓穴を掘ろうにも、凍土はスコップでは硬くて歯が立たない。飢えと重労働で疲労の積もった元気がない者ばかりで、穴掘りの使役に出る者はなかった。そこで考えたのは、夜間石炭を燃やして地面を解かし、翌朝やつと掘った二十センチメートル位の穴に亡骸を置いたのです。その石炭を燃やす炎が毎晩、凍りついたシベリアの夜空にユラユラと揺れていた光景が忘れられない。明日は我が身かと思うとやるせない寂しさがこみあげてきた。

炭坑の中に入って石炭を掘る作業、これには最も身体で健康な者が従事することになってきたが、割当人数不足の場合は軽い病人でもかり

出された。八時間作業・三交代で行われた。炭坑の外で石炭を貨車に積み込む作業、これは主に少年の満軍の候補生が従事した。

森林の伐採作業は冬期気温が零下三〇度以下になると作業を中止することになっていたが、そんな命令は全く無視された。従って伐採作業が一番きつかったと思う。毎日のノルマは決められていたがよく分からなかったので、ノルマが達成されていないと作業が時間延長された。

コルホーズの農作業は、昭和二十一年六月中旬となるとシベリアにも春がやってくるので農作業の労働にかり出されたが、この作業は一番楽しいものであった。暖かくなつてからの外の仕事で比較的軽労働であったし、何よりも兵達が喜んだことは、ソ連兵の目を盗んでジャガイモの種芋をポケットに入れて持ち帰ることができたからである。特に収穫期（八月下旬）の作業は喜ばれた。しかしこの作業期間は短く、割当人数も極めて少なかった。

労働などについて、前述のとおり私の任務は主計の仕事が主なもので、ラーゲルでは、大隊本部にソ連側と連絡をとって一週間に三回位食糧受領のため荷車を引いて二、三人の者を連れて近くのソ連軍の倉庫へ出かけた。炊事場の管理も私の仕事であった。帰国するまで仕事に変更なく、幸か不幸か炭坑には一度も入ったことがなかったので強制労働について語る資格がない。

ノルマを達成しなかった時の処分はなかった。ノルマを達成するとパンの増配やルーブルの支給などがあったと聞くが、私が内地に帰ってから、昭和二十三年になって収容所内が落ち着いてからのことと思う。

どの労役に就くかの基準はなかったと思う。ソ連側が提示する労働者の数、種類によって本部が各中隊長と連絡をとって決定された。

本人からの申告より軍医の判断によって入院または兵舎でそのまま休養するということになる。労役に堪えられない者は入院させられたが、薬も

食物もなく寝ているだけで、回復した者は少ない。

作業場への往復の人数の確認は特に厳重で、何度も数えていた。またラーゲルの監視は厳しくて、通用門、四カ所の監視塔には二十四時間自動小銃を持った兵隊が立っていた。昭和二十年十二月頃、脱走しようとした者一人が射殺されたことがあった。

冬の衣類は、古いものであったがソ連製のものが支給された。防寒帽、靴がなければ凍傷にかかって仕事にならないので、必要最小限の物が与えられた。

食事は、新京を出発する時三カ月分の食糧を貨車に積み込んだが、大豆が大部分で米はなかった。若干あった米・麦は携行食糧として各自に渡してあったので、ラーゲルに到着するまでに食べってしまったようだ。私達が新京から持つて行った食糧は全部ソ連軍の倉庫に納められ、厳重に管理されることとなった。最初一、二年の間は毎朝食

糧受領に出かけた。倉庫にはソ連からの配給物は何もなかった。倉庫番のソ連下士官いわく「長い間の戦争で我が国が食糧不足で困っている。日本人捕虜の食糧支給規定はこのとおりであるが、現物がなからしやうがない」と。米、肉、パン、魚、油〇〇グラムと、立派な献立ができるように記載した文書を見た。

入所して一カ月余りは、大豆が主食であり副食でもあった。高粱や粟が若干配給されると大豆と一緒に炊いて炊いて主食のご飯となる。副食にスープ（塩味をつけた大豆が十五〜二十個位入ったもの）、とても人間の食べるものではなかった。消化の悪い食い物ばかりで下痢患者は次第に増えた。黒パンの配給もあるようになったが（一日三〇〇グラム位）、毎日大豆ばかりの食事では日本人の体力が衰弱して、炭坑に入れない者が続出した。厳寒期（十二月に入ってから）を迎える頃、冷凍のジャガイモとキャベツ等の野菜が配給になり、献立も変化があり皆が喜んだものであった。

しかし米、肉、魚などは皆無で、食物の量は少なかった。食事の關係は入所当時より若干よくなったと思われたが、気温が零下四〇度〜五〇度近くになると収容所内は全く悲惨な状態になっていた。新京の貨物廠に米の在庫がもしあったらこんなひどい目に遭わなくてもよかったと悔やまれてならなかった。

発疹チフスにかかり栄養失調の病人は死ぬ前まで食べたくてもしようがないらしい。死ぬ時は全く苦しまず、朝起きたら隣に寝ていた戦友が死んでいた話は何度も聞いた。冬の零下四〇度位の真夜中、炊事場を私が見回っていた時のことであつたが、毛布を頭からすっぽりかぶってフラフラしながらゴミの山を漁っている痩せ衰えた者がいた。よく見ているとどうやら食物を探しているようである。凍ったキャベツの芯と腐ったジャガイモの皮を手を持って哀れな姿に、まさに餓鬼道に落ちた人間を見る思いがした。

休日は一週間に一日与えられていたと思うが、

労働のない日は雑役の仕事が与えられ、一日中
ゆっくり休むことは少なかつた。

宿舎は大部分が私達の手で急造した倉庫のよう
なものに小さな窓をつけたお粗末なもので、暖房
はペーチカ式のもので、二段ベッドで一人一畳位
の広さであつた。

入所してから一年位過ぎ、病人も死者もやつと
少なくなりかけ、ラーゲル内が落ち着いた頃から
民主化教育が行われ始めた。友の会（会長 松原
某）が結成され、運動が始まつた。しかしまだ水
面下で、目立つた動きはなかつた。

ブカチャーチャの収容所では、私がダモイする
昭和二十二年九月までは目立つた動きはなく、軍
隊の組織がそのまま働いていたが、秋以降に軍隊
の組織は全体的に解体されたと聞いている。

以上のような抑留生活をしてナホトカに着き、
何らトラブルもなく日本の地に帰り着くことがで
きた。

半世紀前の思い出の数々

三重県 森 勇生

一、出生から入隊まで

1 大正十一（一九二二）年五月十五日、三重県
久居市庄田町にて出生。

2 昭和十六（一九四一）年三月、三重県立津中
学校を卒業。その後大阪通信講習所高等科に
て通信士の教育を受け、大阪中央電信局外信
課に勤務する。

二、ソ連侵攻前

1 昭和十八年一月十日、関東軍要員として広島
電信第二連隊に現役として入営。同年二月渡
満、満州電信第七連隊第六中隊に配属、東安
省虎林市に駐屯する。

2 昭和二十年四月、電信第七連隊の主力が本土
に転進したため、残留兵力と転入要員、応召